

大分教区
堅信準備要領

〔第一章〕 堅信準備課程の基本方針

I. 堅信準備

1. 堅信の秘跡に関する教会の教え

「堅信の秘跡は、洗礼および聖体と一緒に組み合わせられて、キリスト教入信の秘跡を構成します。」(『カトリック教会のカテキズム』N.1285)したがってこの三つは一体であり、洗礼の恵みは堅信の秘跡によって完成される。信者は「堅信の秘跡によって、より固く教会に結ばれ、聖霊の特別な力でいっそう強められ、キリストの真の証人として、ことばと行いをもって信仰を広めかつ擁護するよう、より厳しく求められる」(「教会憲章」N.11)。洗礼の秘跡は、堅信と聖体を受けていなくても確かに有効で効果あるものではあるが、キリスト教入信の秘跡としては未完のままであり、「信者は適切な時期にこの秘跡を受ける義務を有する」(『新教会法典』N.890)。信仰は段階を経て成熟していくものであり、段階ごとに聖霊の特別な恵みを必要とするからである。

「適切な時期」について確とした定めはない。堅信を「キリスト者としての成熟の秘跡」と呼ぶ人もいるが、必ずしも年齢のみを基準にするものではない。信仰上の成熟と年齢による成熟とは必ずしも同じではないからである。ラテン教会のここ数世紀来の伝統に従えば、堅信を受けるには「物事をわきまえる年齢」に達していることが必要である(『カトリック教会のカテキズム』N.1307 参照)。

2. 大分教区の基本方針

大分教区では上記の普遍教会の教えに従い、これを実現するため、基本的に洗礼を受けた中学生を対象として、堅信準備課程を整えるものとする。

2-1：前提

受堅希望者は既に教会の一員であり、神の子であり、自身の回心の基礎は受けた洗礼にある。この要領は、彼らが聖霊に支えられた教会の中で生きており、既に神を知り、キリスト教倫理に生き、祈りを知っていることを前提とする。

そのため、家庭での信仰教育と教会学校のカテケージスをもう一度見直し、力を注ぐことが急務である。

2-2：中学生の生きている環境

子どもたちは徐々に社会の中に足を踏み入れて行く。彼らが入って行く社会は価値観の多様な、あるいは価値観の崩壊してしまっている現代の日本の社会である。キリスト信者の家庭でさえ、確固としたキリスト教的価値観に生きているわけではない。堅信準備期は受堅者の自立の途が始まる時であり、反抗期でもある。信仰を含め、すべてを疑問視する時期が始まっているが、それを完全に否定することはないであろう。洗礼の恵みと家庭の教育は偉大である。大分教区では、彼らの視点から信仰を見直し、納得させ、信仰の喜びを味わわせて、彼らが教会の一員として、自身と世界の福音化に遣わされている事実気付かせることを目指し、堅信準備課程を整える。

2-3：準備課程の内容について

キリスト者は、生涯をとおして教理の理解を深める必要があり、みことばに支えられ、聖体に生かされる信仰生活なくしては、キリスト者としてのいのちを全うすることはできない。堅信は新しい段階の出発点である。しかし準備のためにあまり多くの時間を割くことはできず、堅信準備の期間に扱えるのは基本の基本に過ぎない。

これらの条件を満たすために何をどのように扱えばよいだろうか。大分教区では、小学生の時までの家庭・小教区における信仰教育を前提とし、堅信準備期にこれらを明確化、組織化して信仰の基礎として提供することを目指す。堅信後は秘跡の恵みに助けられ、自主的に信仰の学びに参加するよう促す準備課程とする。

大分教区で堅信の準備に特別な力を注ぐのは、もう一つの理由がある。2014年から取り組みが始まっている優先課題の一つに「司祭召命」があるからである。全ての若い信徒に、それぞれ自分の将来について考えさせ、その中から司祭・修道者の召命に応える者が出てくることを願っている。そのような祈りを込めて、堅信準備課程を編成する。

Ⅱ．学習内容全般とその取扱いについて

1. キリスト中心の教育

信仰教育は、そもそもキリスト中心の活動であるということが何よりも強調されなければならない（「カテケージスの一般指針」N.40 参照）。

まず、信仰の教師は究極的にはイエス・キリストご自身というべきである。すなわち、人となられた永遠のみことばご自身が人の心に働きかけ、三位の神の生命の中に導き入れる。信仰教育に従事する者は誰でも、イエス・キリストのみ声を媒介する奉仕者に過ぎない（マタイ 17:14-21 参照）。

次に、信仰教育の内容はキリストの秘義である。そして教会が二千年にわたって、黙想と霊的生活から種々の示唆や光を与えつつ、聖書と聖伝の中に伝えてきた神のみことばである。福音の使信は、その全体が正しく伝えられなければならない。啓示された真理は、本質において有機的統一体をなしており、従って一部を軽視したり、無視したりしてはならない。啓示された真理は神のものであり、そのまま受け入れられ、伝えられるべきである。信仰教育に従事する者は、自分の、あるいは他人の意見や確信を伝えるのではなく、教会の教導権の照らしのもとに、「キリストの秘義、つまり、キリストが告げられた神のみ国、その福音に含まれている要求と約束、ご自分に従う者に示された道」（「要理教育に関する使徒的勧告」N.20）を伝えるべきである。とはいえ、真理には序列が認められ、何がより基本的であるか見極める必要がある（「エキュメニズムに関する教令」N.11 参照）。短い堅信の準備では特にこのことは重要であり、カテキスタは明確にこの観点を理解していなければならない。

それで大分教区では、人間の尊厳と福音の最初の告知（ケリュグマ）を基本的なポイントとして掲げる。具体的には、

- ① **神は人間に語り掛け、人間と出合い、対話をつうじてご自分を知らせること。人はこの出会いによって神と自分自身について知り、変えられていく。**

- ② 神はイエスを遣わし、このイエスの生涯をとおしてご自分のすべて、とくに愛の真心を啓示し、実際に与えたこと。
- ③ 人間には罪があり、それは神（とイエス）との関わりを絶つだけでなく、人格、世界を破壊するものであること。
- ④ イエスは洗礼、堅信、聖体の秘跡によって人間を教会に招き入れ、ご自分の救いのみ業を継続されること。

2. 体験的学習

「信仰は、生きている神との出会いから生まれます。」（「信仰の光」N.4）また、「第二バチカン公会議は、信仰を人間的経験の内側から輝かせ、現代の人々とともに歩ませることができました。こうして信仰が人間生活のあらゆる次元を豊かにすることが明らかとなりました」（同N.6）と教皇フランシスコはいう。それゆえ、学習全体が体験的であるべきである。

2-1：信仰の内容

信仰の内容は、各人に直接向けられた神の愛として提示される。中学生が危険や困難の中でもその意味と希望を見出せるような、一つの信仰体験ができるよう導く。さらに、この世界が罪と悲惨に満ちていることに気付かせ（例えば、殉教と原爆の地・長崎に巡礼することなどによって）、イエスの福音によらない限り、世に救いはないことを理解させる。御父がイエスに油を注がれたのは、イエスが救いの使命を実現するためであった（「カトリック教会のカテキズム」N.1286 参照）。そしてイエスは、信仰者に堅信の秘跡を授けて聖霊で満たし、ご自分の使命に参加させることを理解するよう導く。

2-2：身に着けるべき徳

堅信の秘跡はすべての人の救いのために遣わされた教会の使命への参与を目指すものであるから、準備期間を超え受堅者が以下の徳を身に着けるよう配慮する必要がある。

1) 聖書を読み、祈れるようになる

イエスとともに御父に聴く態度に加え、「道、真理、いのち」であるイエスに学ぶ姿勢を身に着けさせる。そのために聖書を一人で読むことができるよう、その読み方を学ばせる必要がある。

またマリアを母として慕うことができるように、ロザリオの祈り方を学ばせる。

2) 良心に従う力

中学生時代は自由に目覚めるときであり、誤った自由観に陥りやすい。自身の中で働く聖霊の勧めを見極め、これに従う習慣を身に着けさせ、真の自由人とする。

3) 愛する力

愛することが最高・第一であること、真のコミュニケーションの源泉であることを確信し、愛する力を養って、福音化に出発するよう導く（「福音の喜び」N.160 参照）。

4) 将来を考える

中学生は、近い将来、重大な決断の前に立たされる。進学、就職、結婚などである。ただ、キリスト者としての基盤は決まっている。世に救いをもたらす教会の一員として神の国の建設のために働くことである。これを基に、できれば就職までに自分の将来を決定できるよう導く。司祭、修道者の道も含め、教会の宣教活動の実情をよく知らせるべきである。

Ⅲ. 授業時数の取扱い

1. 授業時数

準備の期間は一年間が適当と考える。10のステップを設定しているため、最低、月に一度は授業が必要となる。可能ならば、月2回、20回にわたって準備できるよう計画することを勧める。クリスマス、復活祭は勿論、主日のミサへ積極的に参加できよう工夫する。また、授業内容に応じて、ゆるしの秘跡にも与れるよう配慮しなければならない。

2. 一単位時間

一単位 50分を基準とする。

Ⅳ. 信徒の役割

1. 小教区間の連携

堅信の準備は、対象者の家族だけの問題ではない。カトリック教会のカテキズムには「とくに小教区共同体には受堅者の準備に関する責任が委ねられています」(N.1309)とあり、堅信の秘跡が小教区全体のための秘跡でもあることが示されている。大分教区の小教区はとて小規模であるゆえ、対象者も少人数であるが、カテキスタを探すとすると至難の業となる可能性が大きい。小教区間の連携が必須となる。

2. カテキスタ養成

カテキズムに関する教区の第一の仕事として、カテキスタの準備と養成が考慮されるようにと指摘されている(「カテキズムの一般指針」N.33参照)。堅信を準備させるカテキスタには、系統だった神学の知識が要求される。さらに教区が出すこの要領の学びも必要である。堅信の準備ができるような信徒が育つと、それは教区の宝となり、普遍教会が目指す「信徒の時代」の一部を実現できると思われる。カテキスタ養成は、少なくとも堅信の準備と同じく大分教区の大きな挑戦でもある。

Ⅴ. その他配慮すべき事項

1. 教材・教具の活用

体験的学習を目指すのであれば、教材・教具の活用は必須である。カテキスタが常に連携して、情報交換しながら、質を高めていくよう図るべきである。

2. 不参加者への対応

受堅者には、いろいろな理由で堅信準備の授業に参加できない場合があると思われる。小教区、もしくはブロック全体で知恵を出し合い、全員が堅信の恵みに浴することができるよう工夫しなければならない。

〔第二章〕 目的、対象および学習内容の詳細

I. 目的

洗礼によって神の子とされた者が、さらに堅信の秘跡を受けることによって、聖霊に生かされ、その賜物によって自立したキリスト者となり、神の国の働き人となる。

いのちのつくり主である神は、さらに人を永遠のいのちに招いておられる。洗礼によって新たに生まれキリストに結ばれて神の子とされた信者は、家庭と小教区の中で信仰のいのちを育てられる。信仰のいのちはやがて自立の時を迎える。この時教会は堅信の秘跡を授け、受聖者が聖霊の恵みに支えられて、さらにキリストに近づき、キリストとともに主体的、自主的に神から与えられた使命に生き、神の国の完成に資するよう導く。

II. 対象

大分教区は堅信準備課程の基本方針に従い、中学生を対象とし、高校生にも適用できるよう堅信準備課程を編成する。

中学生時代は、生涯にわたる人格の形成期であり、また日本においては最後の義務教育期間に当たり、人生の方向性の決定について取り組み始めるときである。自立への願望は反抗となって現れ、周囲との関わりに悩んだりする。このように重大な時期に堅信の秘跡を受け、聖霊の導きに助けられて、神の招きを識別し、神からゆだねられた使命に生きることを決意するよう導く。

III. 学習内容の詳細

上記の目的を達成するために、「語りかける神に聴く」ことを軸に内容全体を展開し、信仰の土台を植え付ける。堅信の秘跡によって与えられる聖霊は、心の中に蒔かれたみことばの種をとおして、徐々に人格をつくり変え、やがて社会を変革していく力だからである。具体的には、聖書の読み方を身に着け、福音の最初の告知（ケリュグマ）を深め、「イエス・キリストはあなたを愛し、あなたを救うためにいのちをささげられた。キリストは今なお生きておられ、日々あなたのそばであなたを照らし、力づけ、解放してくださる」（「福音の喜び」N.164）ことを体得させる。

全体を四つの単元に分け、10のステップで展開していく。

單元 A 語りかける神

- ①. **ステップ 1** 自分を見つめる
- ②. **ステップ 2** 語りかける神

単元 B 神に聴く

3. **ステップ 1** モーセの召命物語を読む
4. **ステップ 2** 聖書の読み方を習得する
5. **ステップ 3** すべてを破壊する罪

単元 C 救い主イエス・キリスト

6. **ステップ 1** ことばと業によって神の国の福音を告げるイエス
7. **ステップ 2** 死と復活によって神の国を完成したイエス

単元 D キリストはわたしたちを派遣する

8. **ステップ 1** 教会のメンバー
9. **ステップ 2** 堅信の秘跡
10. **ステップ 3** 直前の準備

単元 A 語りかける神

【目標】 自分の内面を見つめることによって語りかけておられる神に気付く。

まず、堅信の秘跡の必要性を理解させるため、自分を見つめさせることから始める。「人間の条件の秘められた謎は昔も今も人間の心を奥深く揺さぶる…たとえば、人間とは何か、人生の意義と目的は何か、善とは何であり罪とは何であるのか、苦しみは何から起こりどんな目的を持つのか、真の幸福に達するための道はどんなものか、死とは何であり死後の裁きと報いは何なのか」（「キリスト教以外の諸宗教に対する教会の態度についての宣言」N.1 参照）などである。自我に目覚めるこの時期、中学生は人間の根本問題に気付き、悩み始めていると思われる。この時期、とくに重要なのは自由と関係性と将来の問題であろう。このような中学生に、自分の内面に目を向けさせ、広くて深い、そして不可解な人間の神秘に触れさせる。人は自分の内面に目を向けるとき、自分に語りかけている神に出会えることに気付かせ（I コリ 2:9-12 参照）、これからの学びに備えさせる。

ステップ 1 自分を見つめる

【ポイント】 自分の現状、喜びや苦悩に目を向け、自分自身について考える。

カテキスタは、中学生が今、興味を持っていること、悩んでいることを聞き、共に考える。共に考え、共感することによって信頼関係を築く。また、自分が今、人生の中でどんな位置にあるのか考えさせ、自立し、社会生活を始めるための準備期であることに気付かせる。中学生が自分の内面に目を向けるとき気付くものとして、自由と将来の問題、人間関係など、いろいろ考えられるが、根本問題の一つに神の問題がある。人間は神に造られたのであるから、すべての問題の根源には神の問題がある。罪とは何か、死んだらどうなるのか、神は存在するのか、神はどんな方なのか。キリスト教は、神は一人ひとりに語り掛けてくださると説く。これから、一人ひとりに何を、どのように語りかけてくださっているのか学ぶことを告げ、啓示する神に聴きたいという意欲を起こさせる。中学生の悩みについては、関連項目の中で、自分で解決できるよう導くようにする。

最初の時間は、出来れば保護者にも参加してもらい、共に準備する姿勢（体制）をつくる。

ステップ2 語りかける神

【ポイント】 人間は啓示によって神に聴くことができることを理解する。

人間は知性と意識を持って自分と宇宙について、また、創造主についても考え、理解することができることに気付かせる。しかし、人間の知性は、感覚と想像によって真理を把握するので、見える世界を完全に超越する神について確実に知ることは出来ないし、人は利己主義のため、自分に都合の悪いものは拒否しようとして神から遠去かろうとさえする（創世 3 参照）。しかし「神は人間が生き、幸せを見つけるために、ご自分を求めるようすべての人に絶えず呼びかけておられる」（「カトリック教会のカテキズム」N.30）ことに気付かせる。さらに神は「預言者たちによって、多くのかたちで、また多くの仕方で先祖に語られたが、この終わりの時代には御子によってわたしたちに語られた」（ヘブ 1:1-2）ことを知らせる。

説明として、良心の声を取り上げる。良心は、すべての人の心に刻まれた神の望みであり、預言者モーセをとおして「十戒」として明文化され、さらにこれはイエスによって神への愛と隣人愛に高められたことを学ばせる。

単元 B 神に聴く

【目 標】 神のことばに耳を傾ける。

人間の心の中はごった返していて複雑である。神の声は「はるかな遠い声だから」（典礼聖歌 409 参照）、例えばわがままな声にかき消されてしまう。それで、どのように人は神の声を聞くのか、聖書の登場人物から学ばせる。たとえばモーセの召命物語（出3章参照）を読み、「（見えざる）神は大きな愛によって、あたかも友に対するように人間に話しかけ、彼らと住まいを共にしている。これは彼らを自分との交わりに招き、これに与らせるため」（「啓示憲章」N.2）であることを理解させる。

ステップ1 モーセの召命物語を読む

【ポイント】 神に語りかけられた人がどのように神のことばを受け止めたかを学ぶ。

神は普通に誰にでも語りかけてくださる（知恵 7,8 章参照）ことを理解させる。神はある人を選んで、特別に語りかけられる場合がある。モーセやマザー・テレサなどの例を学ばせることによって、聖書が神のことばであることを理解させ、さらに、彼らに倣ってどのように神のことばを受け入れるべきかを学ばせる。

神はモーセに実際の言葉で語ったと聖書は断言している（民 12:8 参照）。マザー・テレサもダージリンへの汽車の中で神の言葉を聞いている（千葉茂樹「マザー・テレサこんにちは」参照）。神のことばを受け止めたモーセは、躊躇しながらもこれに従った。マザー・テレサも神のことばに従い、最も貧しい人々の世界に入って行った。しかし実は、彼らは直接言葉を受ける以前から、すでに神のことばを聞いており、自分たちの人生を変えるほどの強い力を感じていたことを学ばせる。

神のことばを聞いた者は、ことばを預かった者、“預言者”であり、人々に伝える使命がある。預言者たちは言葉だけでなく、生き方そのものも「神のことば」となってわたしたちに語りかけている。聖書は神のことばであり、わたしたちの心の中でささやいている神の密かな声と同じであることを理解させる。

ステップ2 聖書の読み方を習得する

【ポイント】 聖書の登場人物に身を置いて、神のことばを聞く読み方を習得する。

一年間をとおしてイエスの出来事を記念するために典礼歴があることを理解させ、次の日曜日の福音をとおして、聖書の読み方を学ばせる。中高生の集いなどで作った聖書劇などを想い起し、読み方の要領を理解させるのもよい。

また、聖書が朗読される最もふさわしい場はミサ聖祭であることを理解させる。ミサ聖祭には復活したイエスが実際におられ、わたしたちに会いに来られる。ことばの典礼においては、イエスが実際に語られる。聖書は、できるだけミサ聖祭に近い雰囲気の中で読むのが相応しいことを理解させる。ローソクを灯し、生きておられるイエスを迎えて、聖書をとおして語られるイエスに耳を傾けるよう導く。

※(以後の学びからは同じ方法で聖書の朗読をもって開始する)

ステップ3 すべてを破壊する罪

【ポイント】 人間だけに与えられた自由の良い面と危険な面について学び、人類に起こる悲劇が罪の結果であることを理解する。

神とのつながりを生き、隣人との友情に生きるよう召されている人間は、自由を有するがゆえ、自己中心的に生きる誘惑にいつもさらされている。神のみ旨を生き続けることは至難の業であることを経験から理解させる。原爆とアウシュビッツについては、ぜひ学習させるべきである。しかし、どんなに悪と罪の力が強く大きくても、人間を救おうとする神の愛がこれに勝つことを神は約束してくださっていることを教える。

単元C 救い主イエス・キリスト

【目標】 救いの歴史の中心であるイエスの教えとみ業について学び、イエスをとおして呼びかける神のことばに聴く。

「神は…この終わりの時代には、御子によってわたしたちに語られた」(ヘブ1:1-2)。イエスは神の決定的ことばである。イエスの宣教の目的は神の国の完成であり、十字架の死と復活によってこれを完成した。イエスをとおして語られる神の決定的なことばに耳を傾け、神の真心に触れるよう導く。

ステップ1 ことばと業によって神の国の福音を告げるイエス

【ポイント】 見失った一匹の羊を探し求める牧者として父なる神を紹介したイエスは、同じ心をもって生き抜いたことを理解する。

イエスが、いつくしみ深い神について教えたことを、たとえから学ばせる(ルカ15章参照)。また、例えば重い皮膚病の治癒物語(マルコ1:40-45)、善きサマリア人のたとえ(ルカ10:25-37)、一人息子を亡くしたやもめの物語(ルカ7:11-17)などから、イエスの「はらわたがちぎれるほどの」いつくしみの心を学ばせ、御父と同じ心をもって生き抜いたことを理解させる。また、身の危険をも顧みず、ラザロを救いに出発するイエスの姿(ヨハ10:39-11:55)から、イエスが一匹のために命を懸ける「よい羊飼い」であること、そしてそれほどの愛を受ける人間の価値(尊厳)について理解させる。

ステップ2 死と復活によって神の国を完成したイエス

【ポイント】 愛の極みである十字架によって救いがもたらされたことを心に刻む。

神はわたしたちを救うために、「聖書に書いてあるとおり」（I コリ15:3）死と復活という方法を探られた。神は神秘に満ちた方であるが、救いの方についてはなおそのことが言え（I コリ1:23 参照）、その意味を人は汲み尽くすことができない。代理の死、従順、いのちを与えるほどの愛、苦しむ人とともに苦しむ救い主、罪との闘いと勝利、わたしたちへの模範などである。イエスの死と復活は、汲めども尽きない恵みの源であり、七つの秘跡の説明の中で生き生きと取り扱われるべきである。このステップでは、わたしたち一人ひとりとイエスの死と復活が直接関係あることを学ばせ、「十字架の道行き」の祈りを行いながら、十字架の上から、無言のうちに語りかけるイエスに耳を傾けるよう導く。

復活については、空の墓と弟子たちの復活したイエスとの出会いについて説明し、イエスは、罪に対して勝利し（蘇りではなく）、全く異なった存在様式で今も生きておられることを説明する。

単元D キリストはわたしたちを派遣する

【目標】 復活したイエスは教会をとおして働き続けており、信者はキリストに結ばれ、聖霊に生かされて、キリストと共に神の国の働き人となることを知る。

イエスは福音を弟子たちに託したことを学ばせ、教会をとおして救いのみ業が続けられていることを理解させる。中学生時代は、人生設計を描き始める時期であるが、教会のメンバーとして、キリストによって派遣されているという信仰を基礎にして、自分の生き方、職業選択に生かすよう導く。さらに、イエスは「道・真理・いのち」であって、生涯を共に歩いてくださる方であるので、イエスについてさらに詳しく知り、イエスに聴き続ける望みが起こるよう導く。

ステップ1 教会のメンバー

【ポイント】 イエスのわき腹から流れた血（聖体）と水（洗礼）を受けて教会のメンバーとなった者は、三位一体の神に似た者とされ、神を「アッバ父」と呼び、お互い兄弟となることを知る。

※（イエスによって集められ、復活後再集結した集団に聖霊が注がれて教会が誕生したことは、備考において確認する。）

わたしたちは、イエスのわき腹から流れた水（洗礼）によって「神の愛する子」（マルコ1:11）と宣言され、血（聖体）によって復活のいのちをいただいた。そして、イエスとともに「わたしたちの父よ」（「主の祈り」参照）と唱え、「兄弟」として生きるよう呼ばれている。こうして、三位一体の神に似せて造られた（創1:27 参照）人間性が完成する。教会は人間の体（エフェ2:22 参照）、ブドウの木（ヨハ15:1-6 参照）にたとえられるように、強い絆で結ばれており、キリストのように考え、キリストのように行い、キリストのように生きることが信者の基本であることを学ばせ、これを土台に人間関係を考えさせる。自分が関わる具体的隣人とは、神がいのちまでも投げ出して救おうとする者であることを心に刻ませる。

ステップ2 堅信の秘跡

【ポイント】 堅信の秘跡によって受ける聖霊について学び、堅信の秘跡を受ける意味を深く理解する。

すでに学んだ通り、神はいろいろな方法で一人ひとりに呼びかけておられ、さらにイエスを知ることによって神の本心にまで触れることができる。言葉は心が伴わなければ活きたものとはならないが、神（そしてイエス）の言葉を活かしている心が聖霊であることを指摘する。堅信の秘跡によってこの聖霊を受け、イエスと共に人類の救いのために働くよう召し出されることを理解させる。すべての人に共通の呼びかけ（召命、使命）は、今いる場所で兄弟愛を生きることによって、“地の塩” “世の光”（マタイ 5:13-16 参照）となることである。さらに、意味のない人生など一つもなく、神は一人ひとりに使命を与えておられることを伝え、職業選択に当たっては、自分の才能、興味、周囲の勧めなどが参考になるが、最終的決断は神に聴いて、神のみ旨を選び、自分で決断する信仰の態度を学ばせる。実に、「信徒の養成の基本的目標は、自己の召命を発見し、自己の使命を達成していこうとする一層堅固な心構えを養うことにある」（「信徒の召命と使命」N.58）からである。

※(備考で、預言職、王職、祭司職の説明をする。)

ステップ3 直前の準備

堅信の秘跡の儀式書に基づき、リハーサルをしながら心を整える。また、受堅前日、もしくは数日前に、祈りのうちにゆるしの秘跡を受け、堅信の秘跡に備える。

【第三章】 指導計画の作成と指導上の留意点

I. 指導計画の意図と内容

信仰の伝達は本来、家庭のみで達成できるものではなく、共同体の助けが不可欠である。さらに、その内容はすべての小教区において統一されたものであることが望ましい。たとえ各学年に、あるいは小教区に子どもが一人であったとしても、その子どもには計画的で発展的な信仰教育を受ける場が保証されなければならない。そのため大分教区は、信仰のいのちの成長において決定的な時である堅信時に、信仰の定着を図るための基準となる指導計画を提示する。

各小教区（もしくはブロック）においては、これをもとに主任司祭をはじめ、全カテキスタが協力して、組織的、弾力的に信仰教育を施すべきである。

1. 指導計画の内容

指導計画は、堅信準備課程編成の基本方針に基づき、授業が中学生の状況に即して計画的、発展的に行われるよう組織されている。具体的には、授業で指導しようとする内容について、

典礼歴、社会の動向との関連を図り、中学生の実体や多様な指導方法などを考慮して、幅を持たせた四単元を提示することとする。さらにこの四単元を、十のステップに配列し、展開の概要までを示す。

授業の主題は、指導を行うに当たって、「ポイント」とそれを達成するための「資料」によって構成される。

この指導計画は、授業を具体的に立案する学習指導案のよりどころとなる。

なお、指導計画には、次のような項目とその内容を設定する。

- ① 単元と目標
- ② ステップとポイント
- ③ 資料
- ④ 信仰内容（「カトリック教会のカテキズム」との関連）
- ⑤ 展開の概要および指導の方法
- ⑥ 備考（祈り、暗記など）

2. 指導案の作成

各小教区（もしくはブロック）においてカテキスタは、上の指導計画に基づいて指導案を作成、準備して授業に臨むことが必要である。

II. 人格教育

信仰教育は単なる知識教育ではない。基本的に人格教育であり、全過程の中で生きているキリストとの出会いが実現されなければならない。

1. 個別面談

指導の中心は、信仰、自由、コミュニケーション、職業選択に関するキリスト教的基本の定着を図ることを目指す。最初と最後は個別面談（指導）を行うことが勧められる。個別面談は代父母を含めた家族面談が望ましい。

2. みことばに生かされる

各授業の初めに、聖書の朗読と短い黙想の時間をとる。堅信の秘跡は聖霊を受ける秘跡であるから、みことばとこれを生かしている聖霊を心に刻むようにする。

3. すべてを超えて一愛

「カトリック教会のカテキズム」は序論を、「ローマ・カテキズム」の次の司牧原理を述べて、結んでいる。「使徒が模範を示してくれた、終わることのない愛をすべての教理と教えの目的にするというのが、確かによりよい方法です。信じ、希望し、行うべきことを説明する時には、わたしたちの主の愛がいつも現れるようにしなければなりません。申し分のないキリスト教的なすべての徳行は、始めから終わりまで、ただ愛によって貫かれていることを、一人ひとりが悟るためです」。（「カトリック教会のカテキズム」N.25）

Ⅲ. 家庭、小教区の役割

堅信の準備が始まるたびに、家庭、小教区のメンバーは自分が受けた堅信の秘跡を思い出し、自身も新たに七つの賜物に満たされるよう準備すべきである。小教区は少なくとも二度説明会を開催し、両親はこれに出席し、準備内容と受堅後の対応に備える必要がある。説明会は第一時限と最終時限をこれに当てることができる。準備中、両親は、受堅者の相談に乗るなどしてカテキスタを助ける。また堅信後は聖霊の働きに協力し、自由な人間として生きることを助ける。

出来れば洗礼の時の代父母が、堅信の代父母を務める。代父母の役割は形式的に墮している感がある。代父母はもっと積極的に両親と力を合わせ、受堅者を助けるようにする。

小教区はまず祈りで協力する。堅信は一人前の信者とする秘跡であるから、堅信後どのように小教区に迎えるか準備する必要がある。

むすび

中学生は受験準備と部活のために多忙を極めるようになる。高校生はそれに輪をかけて忙しい。信仰生活は三番目か四番目に押し下げられ、現実的には生活の中から消え去ることが多い。そんな中でどのように信仰を守り、育てて行くことができるだろうか。ほとんどの人が手も足も出せず、諦めてしまっているのではないだろうか。すべての信者がこのような現実挑戦する姿勢を持つ必要がある。

勉強も、部活も人格形成に極めて有益なものと考えられる。知識の習得にどんな価値があるのか、部活によって何を得るのか、しっかりした価値判断を、中学生だけでなく、すべての信者ができるようになる必要がある。その上で対策を練るべきであろう。主の次のことばを肝に銘じながら…。「神の国は…畑に宝が隠されている。見つけた人は、そのまま隠しておき、喜びながら帰り、持ち物をすっかり売り払って、その畑を買う。」(マタイ 13:44)